

#### 第4章 不放逸

1. このように勝利者の息子（菩薩）は菩提心をよく堅固に維持し、気を散らさず、常に菩薩行から離れないようにするべきである。
2. よく調べずに始めたこと、よく考えずに始めたことは、それを〔やると〕約束したとしても、〔再び先のことをよく考えて〕やるかやらないかを考えるのが正しい。
3. 仏陀と菩薩たちが偉大なる智慧によって分析され、自分自身もよく調べたことならば、それを先延ばしにすることなどどうしてできようか。（決して怠慢になってはならない）
4. もしそのように誓ったのに、それを実行しないなら、すべての有情を欺くことになり、私が〔来世で〕行くのはどんな場所になるだろう。
5. ごく普通のつまらないものでも、心では「あげよう」と思ったのに与えなかったなら、その人は〔悪趣に堕ちて〕餓鬼となる、とされている。
6. 無上なる幸せ〔の境地〕に心から客人を招いておいて、〔有情を利益して幸せを与える努力をせず〕一切有情を欺くならば、どうして善趣に生まれ変わるなどできようか。
7. ある人（舍利子）が菩提心を捨てたのに解脱を得ることができたのは、業の働きは〔凡夫には〕はかり知れないものであり、一切智者のみがすべてをご存知であるからである。
8. 〔菩提心を捨てることは〕菩薩にとって破戒の中で最も重い罪である。このようなことをしてしまうと、一切有情を利益する行ないが弱くなってしまふからである。
9. 他の人が一瞬でも〔菩薩の〕福德を妨げると、有情利益〔の力〕を弱めることになるので、その人が悪趣に〔生まれる数に〕終わりはない。
10. ただひとりの有情の幸せを破壊しても、私が〔人間の生から〕墮落するならば、虚空のすべてに行きわたる無数の生きものの幸せを破壊したら、どうなるかは言うまでもない。

1 1. このように、強力な破戒と強力な菩提心は、輪廻では交互に混在しているため、〔菩薩の〕地に達するには長い時間がかかる。

1 2. ゆえに、誓いを立てた通りに、私は敬意を持って〔菩薩行を〕成就いたします。今この時より〔菩薩行の実践に〕努力を始めなければ、〔破戒の強い力によって〕下へ下へと〔悪趣に堕ちて〕行くことになる。

1 3. 一切有情を利益される無数の仏陀たちがおられたのに、私は自らの過失によって、その救いの対象になることはなかった。

1 4. 私がまだそのようなことをするならば、何度も何度もそのように悪趣に堕ち、病気や死、切られたり切り刻まれたりする〔苦しみ〕を体験することになるだろう。

1 5. 如来が現れ、〔教えに対する〕信心と人間の生を得て、善行になじむ正しい行ないを私がすること、それはきわめて稀であり、いったいいつ得ることができるだろうか。

1 6. 今日のように、病気もなく、食べ物もあり、害されていなくても、この命は一瞬も〔とどまらず滅していく〕欺く〔性質の〕ものであり、からだは一瞬の借り物のようなものである。

1 7. 私のこのような行ないでは〔再び〕人間の生を得ることはないだろう。人間の生を得られなければ、罪ばかり〔犯して〕善〔行をなすこと〕はできない。

1 8. 善行をなせる恵まれた時でも、私が善行をなさないなら、悪趣〔に生まれ、〕その苦しみに〔打ちのめされて〕無知〔の奴隷〕となった時、私に何ができるというのか。

1 9. 善行もなさず、罪ばかりを積むならば、千万劫にわたって善趣という言葉さえ聞くことはないだろう。

2 0. ゆえに世尊は、大海に漂うくびきの穴に亀が首を入れる〔ことはとても稀なことである〕ように、人間〔の生〕を得ることは非常に得難いことである、と説かれた。

2 1. 一刹那に犯した罪により、一劫にわたって無間地獄にとどまることになるならば、始まりなき輪廻において犯した罪によって、善趣に行くことができないのは言うまでもない。

2 2. それ（無間地獄）を体験しただけでは、そこ（悪趣）から解放されることはない。このように〔以前なした行為の結果を〕体験しつつ、他の罪を次々と生みだしている。

2 3. このような有暇を得ているのに、私が善行に親しまないならば、これ以上の欺瞞は他にない。これ以上の無知も他にない。

2 4. もし私がこれを理解していても、無知のため〔いまだに〕怠慢に過ごしているならば、死に直面した時にひどい苦しみを味わうことになる。

2 5. 耐え難い地獄の火で、長い間私のからだは焼かれるだろう。耐え難い後悔の火が燃え盛り、心に苦悩が生じることに疑いはない。

2 6. 〔有暇具足を備えた人間の生という〕非常に得難く、利益が果たせる状況を偶然に見つけた。私には〔善悪を判断する〕智慧があるのに〔未だに怠慢に過ごして善行を積まずにいる。〕のちに再び地獄に連れて行かれても、

2 7. 呪文によって混乱したかのように、私には〔有情を利益しようという〕心がない。何が私を混乱させたのかというと、私にもわからない。私の中にどんな〔因が〕あるというのだろう。

2 8. 怒りや執着などの敵には手足などが無い。勇者でも賢者でもないのに、どうやって彼らは私を奴隷のようにしたのか。

2 9. 〔煩悩は〕私の心に住みながら、喜んで私に害を与える。それに対して、怒らず忍耐するのは正しくない。これに忍耐するのは非難すべきことであり〔煩悩を敵と見て打ち負かす努力をするべきである。〕

3 0. もし天人や阿修羅たちのすべてが私の敵となって立ち上がっても、彼らでさえ私を無間地獄の火の中に連れ込むことはできない。

3 1. この強力な煩悩という敵〔が生じると〕、何と出会っても須弥山でさえ灰も残

さず〔すべて滅ぼし、〕そこに私を一瞬にして投げ込むであろう。

32. 煩悩という私の敵は、始まりなき遠い昔から長い間〔私に害を与えてきた。〕他のどんな敵でさえ、このように〔限りなく〕長く〔私を〕害する者はいない。

33. 親しく仕えれば、すべての人は〔その人に〕利益と幸せを与えるが、煩悩に仕えようと、のちに苦しみと害をもたらす。

34. このように長い間常に敵である者は、害の集積をますます増やす唯一の因である。〔その敵が〕私の心に確かに住み着いているのに、輪廻を怖れずに喜んでなどいられようか。

35. 輪廻の監獄の看守、地獄などの死刑執行人などが、もし〔私の〕心にある執着の網に住み着いているのなら、どうして私に幸せなどあるだろう。

36. このように、私が〔聖者の智慧を〕実現してこの敵を確実に克服するまで、私はこの努力をやめない。ある時はささいな害にさえ怒り、〔この敵を滅ぼそうと考える〕自信を高め、敵を克服するまでは眠らない。

37. 本来的に死の苦しみ〔を越えられない〕弱い者〔である敵〕と戦場で並んで戦う時は、必死で打ち負かそうと望んで、〔敵が与える〕弓矢と槍と武器に打たれる苦しみもかえりみず、目的を達成するまで引き返さない。

38. 常にすべての苦しみの因である〔煩悩という敵が〕本来的に敵であるのは確実である。これを打ち負かす努力をするために、私が今日、百の苦しみの因となるいかなるものに対しても、〔自分にはできないと考える〕怠惰な心を起こすべきでないことは言うまでもない。

39. 敵によって受けた意味のない傷跡さえ、からだの装飾のように掲げて〔誇りにして〕いるならば、大きな意義のあることを達成するために正しい努力をする私に、〔苦行の〕苦しみが〔どれだけ生じても、それが〕害を与えることなどあろうか。

40. 猟師、屠殺人、農夫たちが生活の糧を得ることだけを考えて、寒さ暑さなどの害に耐えているのだから、有情に幸せを与えるために〔修行道の実践をしている〕私が〔苦行の苦しみに〕耐えられないことなどあろうか。

4 1. 十方位の虚空を満たす〔すべての〕有情を煩惱から解放すると誓っても、自分自身でさえ煩惱から自由になっていないのだから、

4 2. 自分の〔能力の〕限界さえ知らずに教えを説くのはまるで狂人のようではないか。ゆえに煩惱を克服するために、常に退転することなくとどまるべきである。

4 3. 私はこれ（煩惱を滅する対策）に執着し、〔煩惱に対する〕憎しみを維持して、戦場で会って〔打ち負かそう〕。しかし、〔煩惱を滅する対策に執着し、煩惱を憎むという〕様相を持つ煩惱は、〔滅すべき〕煩惱ではなく、煩惱を断滅する〔対策となるものなので、捨てるべき煩惱〕ではなく、〔この執着に欠点はない。〕

4 4. 私は焼き殺されても、私の頭が切られてもかまわない。どのような時であれ、煩惱という敵に屈服してはならない。

4 5. 普通の敵は国から追放されても他国で暮らし、力を蓄えて戻ってくるが、煩惱という敵はこれと同じではない。

4 6. 煩惱は力の弱いものであり、智慧の目によって滅される。私の心から取り除いた〔煩惱〕は、いったいどこへ行くというのか。（他に行くところはない）どこかにいて〔再び力を蓄えて〕私を害するために戻ってくるだろうか（そのようなことはない）しかし、心の弱い私には努力して〔聖者の智慧を生む〕ことができない。

4 7. すべての煩惱は、その対象物にも存在せず、〔目などの〕感覚器官の集まりにも存在せず、〔感覚器官と対象物が出会う〕その中間にも存在せず、それ以外のところにも存在しない。それならば、それらはいったいどこに存在して一切有情を害しているのか。これは幻のようなものである。ゆえに、心にある恐れを捨てるために〔究極のものありようを〕知る努力をするべきである。意味のないことのために、なぜ私が地獄などで害されなければならないのか。

4 8. このように〔様々な角度から〕よく考えて、このように〔仏陀が〕説かれた菩薩の修行を成就するために努力するべきである。医者言葉を聞かなければ、治癒を求める病人が様々な薬で癒されることなどどうしてあろうか。